

アジア・太平洋研究センター主催，総合政策学部共催講演会

日 時：2024 年 7 月 18 日（木）

場 所：南山大学 G 棟 1 階 G30 教室

演 題：ガザ紛争の背景と今後の展望

講 師：酒井 啓子氏（千葉大学国際高等研究基幹特任教授，グローバル関係融合研究センター長）



2023 年 10 月にガザ紛争が勃発して 10 か月余りが経過した時点で，戦闘がやまず，予断を許さない状況のなかで，長らくイラクをおもなフィールドとして中東地域の研究に取り組んでこられた千葉大学の酒井啓子教授をお招きして，ガザ紛争の現状についてのご講演をお願いしました。講演の概要は以下の通りです。

2023 年 10 月 7 日にガザのハマース 2,600 人以上の戦闘員がイスラエル領内に入り，260 人を殺害し，200 人以上を拉致した。イスラエル軍はガザをすぐに完全封鎖し，空爆が開始され 10 月 27 日には地上戦も開始された。パレスチナの人口は名古屋市とほぼ同じ規模であり，面積も名古屋市より少し大きい程度である。すでに死者は 4 万人近く，深刻な飢餓状況が生じており，人口の 9 割が避難民となっている。しかし，国連においても常任理事国間で足並みが揃わず，有効な対策を打つことができていない。

アメリカの中東政策は，2001 年以降は，原油供給の安定的確保，イスラエルの安全保障，反米諸国に対する制裁・軍事攻撃（対テロ戦争）を基本としており，イスラエルの世論は現在，ガザやヒズブッラーに対して強硬的な意見が優勢である。イスラエルの目的を考えるには，中世から近代にいたる欧州における反ユダヤ主義，第 1 次世界大戦から第 2 次世界大戦に至るイギリスの対中東政策の矛盾，ナチスによるホロ

コーストを理解しておく必要がある。また、密接に関係するが、パレスチナについても、その歴史を1947年の国連パレスチナ分割決議、1948年イスラエル建国宣言、第1次中東戦争、パレスチナ難民を扱うUNRWAの1949年の設立、1956年第2次中東戦争、1967年第3次中東戦争、1973年第4次中東戦争の経緯を知る必要がある。

他方で、和平交渉については、1979年のイスラエル・エジプト単独和平、1991年マドリード国際会議、1993年のオスロ合意がある。オスロ同意は、2民族2国家案という考え方であったが、占領地でのイスラエル人入植地の建設は着々と進んできた。さらに、難民組織であるPLOと異なり、ハマース（イスラーム抵抗運動）の起源はムスリム同胞団（エジプトのイスラーム組織）のパレスチナ支部である。社会慈善事業や、富の分配、住民サービスなども担い、国家が機能していないその代替としてイスラーム主義が機能しているという側面がある。周辺のアラブ諸国は、イスラエル非難、パレスチナ支援の姿勢を取るが、深くは関与したくないというところもある。イランと抵抗の枢軸（レバノンのヒズブッラー、イラク・シリアのイスラーム民兵勢力、イエメンのフーシー派）は、イスラエルの挑発に対して、とくにイランはできる限り自制して、アメリカとの衝突に発展させないようにしている。

日本の対中東の政策としては、まず1973年の二階堂官房長官談話が重要である。これは安保理決議242とパレスチナ人の自決権に関する国連総会決議を支持するものである。また、ガザに対して無償・草の根援助を行ってきた。

現在の状況としては、第一に、イスラエルの攻撃を停止させる能力のある国はないと考えられ、第二に、攻撃後のガザをどう統治するのかという青写真がみえない、第三に、アラブ諸国の調整能力には期待できず、第四に、反イスラエル「抵抗の枢軸」がどこまで自制できるかも不明で、第五に、国際的な対イスラエル反対ムードがどのような暴発を招くかについても目を配る必要がある。

このような深い知識に裏打ちされたご講演に対して、この問題の歴史的な経緯やその複雑さ、解決の難しさ、日本が貢献できることなどについて、フロアから質問や感想が多数寄せられました。天井のない牢獄とも呼ばれてきたガザの状況に関する分析を通じて、文明や宗教の交錯する場所であることや、原油などのクリティカルな資源をめぐる争いの地であることの困難が浮き彫りになり、中東情勢の背景をより深くかつ広く知ることの必要性和重要性を改めて認識させるご講演でした。中東情勢に関する講演会はこれまであまり多くなく、歴史や現状について、さらに講演会等を企画したいと思います。

（文責：佐藤 創）